




審 査 結 果 の 要 旨

報告番号	乙 第 2897 号	氏名	平川 洋平
審査担当者	主 査	白 濱 正 博	
	副主査	安 陸 等 恩	
	副主査	山 木 宏 一	
<p>主論文題目： Prognostic value of the sliding length of cephalocervical screws to predict the risk of non-union after osteosynthesis: a retrospective analysis of 86 patients with intracapsular femoral neck fractures. (Cephalocervical screw を用いて骨接合術を行った大腿骨頸部骨折術後の偽関節発生予測においてスライディング量における予後判定：86 例に対する後ろ向き研究)</p>			

審査結果の要旨（意見）

平均寿命更新の結果、国内だけでなく世界的にも大腿骨頸部骨折患者は増大の一途であり、その予後において早期手術加療および早期運動療法は重要であると考えられる。手術加療における臨床成績は、術後のADL改善において重要な因子であり、骨癒合獲得のために様々なインプラントが開発されている。しかし、術前骨折型や術後整復位・術後 telescoping 量等、様々な要素において術後偽関節発生に関する報告がなされている。今回の研究において、術後早期スライディング量が、術後の偽関節発生予測に寄与している可能性が示唆された。これは、術後臨床成績や予後に関与する大きな因子である貴重な臨床研究成果であると思われる。本研究は大腿骨頸部骨折に対する重要な論文に値すると思われる。

論文要旨

今回我々は Dual SC screw (以下 DSCS) を用いて骨接合術を施行した大腿骨頸部骨折術後の偽関節発生予測に、術後早期 (2 週) のスライディング量 (Early Sliding Length 以下 ESL) が予後判定因子となりうるかについて検討した。対象は 2008 年～2013 年にかけて当院にて骨接合術を施行し最低 6 カ月以上経過観察できた大腿骨頸部骨折患者 86 例 (非転位型 53 例・転位型 33 例) であった。術前骨折型 (Garden 分類)・骨折の整復度 (術後 Garden alignment index 以下 GAI)・ESL について骨癒合群・偽関節群の 2 群間で評価し、ESL については偽関節に関する相関性についても評価した。骨癒合例は 74 例 (86%)・偽関節例は 12 例 (14%) であった。GAI は両群間で有意差はなかった (正面; $p=0.168$ 、側面; $p=0.159$)。ESL は偽関節群で優位に大きかった ($p=0.0001$; 近位 screw, $p<0.0001$; 遠位 screw)。ESL における ROC 曲線であるが、近位 screw は AUC 0.845 で偽関節発生におけるカットオフ値 1.0mm (感度 91.7%・特異度 74.3%・ $p=0.0002$)、遠位 screw は AUC 0.867 で偽関節発生におけるカットオフ値 1.4mm (感度 83.3%・特異度 81.1%・ $p=0.0002$) であり、ESL は偽関節発生に深く関与していると考えられた。本研究において、ESL は DSCS を用いて骨接合術を施行した大腿骨頸部骨折術後の偽関節発生予測に良い予後判定因子となることが示された。